様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年　3 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2008
課題番号：19730337
研究課題名（和文）結婚と夫婦関係の変容過程
—1950 年代の夫婦調査結果の分析をとおして—
研究課題名（英文）The Transformation of Marriage and Marital relationships：
Through the Analysis of Research for Married Couples in 1950s

研究代表者
青柳　涼子（AOYAGI RYOKO）
淑徳大学・総合福祉学部・専任講師
研究者番号：70383362

研究成果の概要：本研究の目的は 1959 年に Robert O.Blood,Jr.を中心とする研究者グループが、東京の 3 つの団地住民に対して実施した「都市家族の配偶者選択及び夫婦関係調査」の個票データの再集計作業をとおして、戦後日本における結婚と夫婦関係の変容過程を再検討することにある。分析の結果、かつてブラッドが指摘した配偶者選択方法の違いによる夫婦の関係性の差異は、統計学的には必ずしも有意な差とはいえず、さらに詳細な分析の必要性が示唆された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	500,000	0	500,000
2008 年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
年度			
総　計	600,000	30,000	630,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学
キーワード：夫婦関係・家族・伴侶性・役割構造・勢力構造・結婚・恋愛結婚・見合い結婚

１．研究開始当初の背景

本研究で扱うデータは、アメリカの社会学者ロバート・ブラッド（Blood,R.O.,Jr）を中心とする東京都立大学および東京教育大学の研究グループが 1959 年～1960 年に東京の 3 つの団地住民に対して行った調査票調査（「都市家族の配偶者選択及び夫婦関係調査」）で得られたデータである。はじめに、このブラッドらの調査について簡単に説明をしておきたい。この調査の目的は、「都市家族、殊に夫婦又は夫婦及び未婚の子女からなる家族について、『配偶者の選択方法』及び『夫婦関係』を、調査を通じて科学的に解明しようとする」ことにあった。ブラッドの関心は、第一に、日本における配偶者選択の新・旧の体系、すなわち見合い結婚か、恋愛結婚か、という差異が結婚後にどのように異なった結果をもたらすのかという点にあった。ブラッドの第二の関心は、結婚におよぼす内外の力の効果は、東京とデトロイトでは

同様だろうか、という点にあった。ブラッドは、この日本での調査に先立つ 1955 年、アメリカデトロイトで大規模な夫婦関係調査を実施しており、日本における本調査は、日米比較のための調査研究として位置づけられていた。

こうした関心に基づき、調査対象者は、「親又は傍系親が同居していない世帯」であり、かつ、「世帯主年齢 40 歳以下の世帯」に限定された。若い世代に限った理由は、「恋愛結婚成立の素地を持った人々を少しでも多く得たい」と考えられたためである。調査方法は、妻に対しては構造化面接調査法、その夫に対しては留め置き調査法が採用された。

調査項目は、基本属性のほか、配偶者選択に関する項目、役割構造や勢力構造に関する項目、伴侶性や満足度など夫婦の関係性に関する項目などが揃っている。妻に対する調査票と夫に対する調査票は、それぞれ、夫婦共通の項目と独自の項目から構成されている。

ブラッド帰国後、ブラッドらの調査の調査原票ならびに関連書類一式は、研究チームの一員であった森岡清美氏（当時 東京教育大学助教授）に託された。本研究は、50 年間にわたり保管された貴重な調査原票の利用の許しを得て行なわれるものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、ブラッドらの調査の個票データの再集計作業をとおして、戦後日本における結婚と夫婦関係の変容過程を再検討することにある。この調査の結果は、すでに、ブラッド著（田村健二監訳）『現代の結婚　日米の比較』（1978 年、培風館）という書籍においてまとめられているが、そこで示された調査の結果は、統計技術上の時代的制約を受けて、単純集計またはクロス集計にとどまっている。本研究は、さらに詳細な分析を行うべく、これを再入力・再分析するものである。

ブラッドらが調査を行った 1959 年は、日本の家族が大きく変わる直前である。ブラッドが注目した配偶者選択の方式、すなわち「見合い結婚」と「恋愛結婚」の比率について、日本ではかつて「見合い」が「恋愛」を上回っていたものの、1960 年代半ば以降に「恋愛」が「見合い」を上回るという変化を経験した。今日では、言うまでもなく、「恋愛結婚」が大半を占めており、その意味でブラッド調査は日本の配偶者選択および結婚に大きな変化が起きる直前に行なわれた貴重な調査といってよい。「見合い」が多数派を占めていた時代において、先進的な「恋愛結婚」をした都市部若年カップルが、当時どのような夫婦関係を築いていたかを明らかにすることは、日本の配偶者選択と結婚、夫婦関係がどのように変わってきたのか変化のプロセスを示すことにほかならない。

３．研究の方法

（１）データ入力の準備。約 50 年前の調査票原票は、すでにかなり劣化をしている。そのままの状態では、コーディングやその後の確認作業にも支障をきたすことになるため、いったん、全調査票を複写することにした。その後、コード表の作成、コーディング、データ入力、エラーチェック等を行なった。データは、まずエクセル・データファイルへ入力したのち、ＳＰＳＳデータ・ファイルにデータを読み込ませる作業を行なった。なお、調査票において学歴（最終学校）や職業などのフェイス項目が自由記述になっており、これを変数化することの困難に直面した。分析前に行なうべき諸手続きにかなり多くの時間を割く必要が生じ、平成 20 年度末にようやく基礎集計結果をまとめた第一次報告書を刊行することになった。

（２）データの基礎集計。単純集計や性別等基本属性ごとのクロス集計を行い、その結果をもとにデータの大局をつかんだ。

（３）分析枠組みの具体化と研究報告。今後、より詳細な分析を行い、早急に論文としてまとめていく予定である。

４．研究成果

（１）421 組の夫婦データの概要を示しておこう。

①夫婦が出会った時期：

昭和 2～9 年　　3 ケース
昭和 10～19 年　13 ケース
昭和 20～29 年　267 ケース
昭和 30～33 年　137 ケース

②出会いのきっかけ（妻の回答）：

他の人の紹介　　212 ケース
他の人の紹介ではない　208 ケース

③紹介者（妻の回答）：

上位 3 位　両親または友だち　23.1%
　　友人　　18.4%
　　年上の親類　　17.0%

④結婚の種類（配偶者選択方法）：

結婚の種類.妻 と 結婚の種類.夫 のｸﾛｽ表

			結婚の種類.夫		
			見合い結婚	恋愛結婚	合計
結婚の種類.妻	見合い結婚	度数	115	12	127
		総和の％	28.0%	2.9%	30.9%
	恋愛結婚	度数	17	267	284
		総和の％	4.1%	65.0%	69.1%
合計		度数	132	279	411
		総和の％	32.1%	67.9%	100.0%

自分たちの結婚が「見合い結婚」であるか、「恋愛結婚」であるかについて、大半の夫婦は共通の認識を有していたが、一部の夫婦の認識は、互いに異なるものであった。「見合い結婚」と回答した夫婦は 115 組（全体の 28.0%）、「恋愛結婚」であると回答した夫婦は 267 組（同 65.0%）いた。妻は「恋愛結婚」と回答したのに対して夫は「見合い結婚」と回答した夫婦は 17 組（同 4.1%）、妻は「見合い結婚」と回答したのに対し夫は「恋愛結婚」と回答した夫婦は 12 組（同 2.9%）存在した。なお、調査票には、「見合い結婚なり恋愛結婚という言葉が、あなたの場合にどの程度しっくりあてはまるか説明してください」という項目も設定されており、この自由記述の内容について、今後、分析を加える予定である。

⑤結婚の時期：
昭和 2～9 年　1 ケース
昭和 10～19 年　3 ケース
昭和 20～29 年　160 ケース
昭和 30～33 年　256 ケース

（2）配偶者選択方法と家事分担状況

妻用の調査票に用意された家事分担状況を知るための項目は、以下の 9 項目である。①「ふとんあげ」（朝、布団を上げるのはどちらですか）、②「家の手入れ」（家の中や、家の周りの一寸した修理や手入などは、どちらがなさいますか）、③「荷物持ち」（外に出られたとき、お子さんを抱かれたり、スーツ・ケースの様な重い荷物を持つのはどちらですか）、④「嗜好品の買い物」（御主人の好物を買いに行かれるのはどちらですか）、⑤「御主人の下着類」（御主人の日曜衣類（下着やハンカチ等）を買いに行かれるのはどちらですか）、⑥「御主人の洋服の始末」（夜、御主人が脱がれた洋服をたたんで蔵われるのはどちらですか）、⑦「お子さん連れの外出」（日曜等にお子さんを連れてお出掛けになるのはどちらですか）、⑧「お子さんの躾け」（お子さんに躾けをなさるのはどちらですか）、⑨「お子さんの勉強」（お子さんの勉強をみてあげるのはどちらですか）。このような項目に対して、選択肢は「いつも御主人」「御主人のほうが多い」「お二人が同じくらいの割合で別々に」「お二人が一緒に」「あなたの方が多い」「何時もあなた」の 6 つである。

この問いの回答についてのブラッドの分析によれば、「見合い結婚の妻は恋愛結婚の妻に比べて、家事労働全体にわたってより多くのことを行なっている」（ブラッド 1967＝1978：76）。確かに、各項目の夫婦分担状況を得点化したうえで、その平均値を「見合い結婚」の場合と「恋愛結婚」の場合で比較してみると、「見合い結婚」の妻のほうが「恋愛結婚」の妻よりも幾分多く家事を担当している。そこで、今回の分析では、配偶者選択の方式は、結婚生活における夫婦間における家事分担状況に影響を与えるかどうかに着目し、これらの項目について、それぞれクロス集計を行った。その結果、9 項目の家事のうちで有意な差がみられたのは、①「ふとんあげ」のみであった（p＝0.010）。6 つの選択肢のうち、「いつも御主人」「御主人のほうが多い」を夫担当群、「お二人が同じくらいの割合で別々に」「お二人が一緒に」を夫婦同程度群、「あなたの方が多い」「何時もあなた」を妻担当群に分けて分析してみると、「恋愛結婚」の妻の 30.5%が「ふとんあげ」を「夫担当」と回答するのに対し、「見合い結婚」の妻のなかで「夫担当」と回答する者の割合は 16.1%に過ぎなかった。これまでの分析では、「見合い」か「恋愛」か、という配偶者選択における差異は、その後の結婚生活における家事分担状況を大きく左右していないことがわかった。

（3）配偶者選択方法と勢力構造

妻用の調査票に用意された勢力構造を知るための項目は、以下の 9 項目である。①「保険加入」（例えば、保険等に入る時最終的にお決めになるのはどちらですか）、②「新しい洋服」（あなたが新しい洋服をお買いになる時最終的にお決めになるのはどちらですか）、③「香典の額」（お香典の額や、お祝いの金額を最終的にお決めになるのはどちらですか）、④「休日の外出先」（休みにどこかにお出掛けになる様な時の行先を最終的にお決めになるのはどちらですか）、⑤「夫婦の交わり」（夫婦の交わりをなさる時、最終的にお決めになるのはどちらですか）、⑥「ラジオの番組」（夜きくラジオやテレビの番組を最終的にお決めになるのはどちらですか）、⑦「お子さんの小遣」（お子さんのお小遣いの額を最終的にお決めになるのはどちらですか）、⑧「お子さんのおけいこ事」（お子さんに、音楽や舞踊などのおけいこ事をさせたり、算盤塾に通わせたりする時、最終的にお決めになるのはどちらですか）、⑨「お子さんの学校」（お子さんをあげる学校を最終的にお決めになるのはどちらですか）。このような項目に対して、選択肢は「何時も御主人」「御主人の方が多い」「お二人が同じ位の割合で別々に決める」「何時もお二人の間で妥協なさる」「あなたの方が多い」「何時もあなた」の 6 つである。

この問いの回答傾向について、ブラッドは「見合い結婚の夫のほうが恋愛結婚の夫よりもわずかに勢力が強い」（ブラッド 1967＝

1978：73）と述べている。しかしながら、今回、9つの各項目の回答を、「見合い結婚」の場合と「恋愛結婚」の場合で比較してみると、両者の間に差はほとんどみられないことが明らかになった。むしろ、①②⑦⑧⑨では、「恋愛結婚」の妻のほうが、「見合い結婚」の妻よりも「夫が担当する」と回答した割合が高いことがわかった。⑦⑧⑨はいずれも子どもに関する事柄の決定権である。とりわけ、⑨「子どもの学校」について、「見合い結婚」の場合「夫担当」の割合は9.1％であったが、「恋愛結婚」の場合「夫担当」の割合は23.5％を占めた。子どもに関する項目で「見合い結婚」の夫よりも「恋愛結婚」の夫のほうが関与する割合が高い点は、近代家族が「子ども中心」家族を形成するという先行研究の知見を裏付けるものとして注目に値するといえよう。

（4）配偶者選択方法と伴侶性

妻用の調査票に用意された、夫婦の伴侶性を知るための項目は、以下の 6 項目である。①「その日の出来事」（御主人は、その日の出来事をどの位あなたにお話しになりますか）、②「ニュース」（新聞やラジオで知るニュース（御家族以外の出来事）をどれ位御主人と話し合われますか）、③「両親を訪問」（どの位御夫婦で御両親や親類の方々と往き来なさいますか）、④「友人の集り」（どの位御夫婦でお友達と往き来なさいますか）、⑤「御夫婦で外出」（どの位御夫婦で外に遊びに出かけられる事がありますか）、⑥「愛情の表現」（お宅の御主人は、どの位あなたへの愛情を言葉や仕草や表情でお示しになりますか）。選択肢は、「毎日」「殆ど毎日」「週に１・２度」「月に２・３度」「月に１度」「年に２・３度」「それよりも少ない」「全然ない」の 8 つである。①「その日の出来事」や②「ニュース」について、「毎日」または「殆ど毎日」話すという回答は、「見合い結婚」「恋愛結婚」ともに、約7割を占めている。③「両親を訪問」する頻度について最も多い回答は、「見合い結婚」の場合「年に２・３度」（27.6％）であり、「恋愛結婚」の場合「月に１度」（27.8％）である。「恋愛結婚」の妻のほうが頻繁に「両親を訪問」しているという傾向がみられた。「見合い結婚」の妻の約 2 割は年に２・３度よりも少ない頻度でしか両親を訪問していない。④「友人の集り」については、「見合い結婚」「恋愛結婚」ともに「年に２・３度」が3割程度で最も多かった。⑤「夫婦で外出」については、「見合い結婚」「恋愛結婚」ともに「月に２・３度」が 3 割程度、「月に１度」が3割程度を占めた。⑥「愛情の表現」については、「見合い結婚」の場合「週に１・２度」が最も多く（23.6％）、「恋愛結婚」の場合「殆ど毎日」が最も多かった（32.7％）。しかしながら、全体としては、「恋愛結婚」か「見合い結婚」かによって、夫婦の伴侶性に大きな差はみられない。統計的検定結果でも有意な差があるという結論にはいたらなかった。

（5）配偶者選択方式と生活満足度

妻用の調査票に用意された、生活満足度を知るための項目は、以下の 10 項目である。①「妻として尊重」（御主人が、あなたを妻として尊重していらっしゃるという点ではどうお感じになっていらっしゃいますか）、②「家事の手伝い」（御主人が家事を手伝ってくださるという点についてはどうお感じになっていらっしゃいますか）、③「家事への関心」（家庭内で物事をお決めになる時、御主人がそれらの事にどれ位関心をもって居られるかと言う点についてはどうお感じになっていらっしゃいますか）、④「家事の相談」（家庭内で物事をお決めになる時、御主人があなたに相談をなさると言う点についてはどうお感じになっていらっしゃいますか）、⑤「生活力」（御主人の生活力（衣食住等）と言う面ではどうお感じになっていらっしゃいますか）、⑥「父親として」（お子さんの父親としては如何なものでしょうか）、⑦「立場の理解」（御主人があなたの立場やお気持ちを理解してくださるという点ではどうお感じになっていらっしゃいますか）、⑧「奥さんのお相手」（御主人があなたのお相手をして下さるという点ではどうお感じになっていらっしゃいますか）、⑨「夫婦の交わり」（御主人との夫婦の（性的な）交わりについてはどの程度満足なさっていらっしゃいますか）、⑩「愛情」（御主人の愛情をあなたはどの様に感じていらっしゃいますか）。選択肢は、「全然駄目」「不満に思う」「もう少しどうにかなればと思う」「まあまあと言うところ」「可成満足しています」「満足しています」「申し分なし」の 7 つである。このうち「全然駄目」「不満に思う」「もう少しどうにかなればと思う」「まあまあと言うところ」を不満足群、「可成満足しています」「満足しています」「申し分なし」を満足群としたうえで、「見合い結婚」「恋愛結婚」別に比較をしてみると、①「妻として尊重」のみ、有意な差がみられた（$p=0.018$）。「見合い結婚」の妻の満足群は 67.7％であったが、「恋愛結婚」の妻の満足群は79.0％と8割を占めた。他方、その他の9項目については、いずれも差異がみられず、⑩「愛情」についての満足度についてすら、「見合い結婚」と「恋愛結婚」の間に差異は見られなかったのである。

（６）まとめと今後の課題

ブラッドの第一の関心は、日本における配偶者選択の新・旧の体系が結婚後にどのように異なった結果をもたらすのかという点にあった。これまでのところ、配偶者選択の新・旧の体系が結婚後に及ぼす影響は、あったとしても非常にわずかな影響であったといわざるを得ない。言い換えれば、当時の「恋愛結婚」夫婦は、結局のところ、その後の家庭生活において「見合い結婚」とほとんど変わらぬ夫婦関係を築いていたということである。そうはいっても、前述のとおり、子どもに関わることがらについては、「恋愛結婚」夫婦と「見合い結婚」夫婦に異なる側面も見出された。今後、子どもの成長とともに夫婦の関係性に差異は生じるのかを分析したい。

また、これまでは主に妻側の調査結果を分析に用いてきたが、今後、夫側の調査結果も用い、夫側の回答の傾向をおさえるとともに、夫婦間においてどのように回答が重なったり、異なったりするのかについても着目をして、分析作業を進めていきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

青柳　涼子（AOYAGI RYOKO）

研究者番号：70383362

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：